

アメリカはどこに向かうのか？

村田 晃 嗣

奨励者紹介[むらた・こうじ]

同志社大学法学部教授

[研究テーマ]戦後アメリカ外交、アメリカ政治と映画文化

あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていただきます。

(コリントの信徒への手紙一 10 章 13 節)

二つの体験

みなさん、おはようございます。ただいまご紹介いただいた法学部の村田です。このような機会を与えていただいて大変うれしく存じます。

「アメリカはどこに向かうのか？」という大きなテーマですが、最初に極めて個人的な体験からお話しさせていただこうと思います。今から 30 年ほど前、大学院生としてアメリカ合衆国の首都ワシントン D. C. に留学をしていました。ある雨が降る日だったのですが、私は、大学の近くを歩いていて折り畳み傘が何かのはずみで開いてしまいまして、近くを通っていた白人の男性の方に私の傘が接触してしまいました。私はすぐに「Excuse me, I am sorry.」と申しました。ところが、その白人の男性は私をきつく睨んで、ここでは口にできないような罵りの言葉を私に向けたのです。そのまま聞き流してしまえばよかったのですが、私は若かったこともあるし、その白人の男性の私に対する態度に、ある種の差別を感じて、その時に「I said “Excuse me.”」、申し訳なかったと言ったじゃないですか、というと、さらにその男性は私に対して罵りの言葉を投げかけて去っていったのです。それが 30 年ほど前のことです。

それから今度は 15 年ほど前、日本に帰ってきて同志社で教鞭をとるようになりましたが、四条の通りを歩いている時、人が多くて混雑しており、私の後ろから自転車に乗ってきた若い女性が私たち、歩行者を追い越す時、その自転車が私に軽く接触したのです。たいしたことはありませんでした。しかしそのままその女性が行ってしまおうとするので、私は彼女に対して「失礼ではないですか」と声をかけると、彼女は私の方をきつく睨んで「ごめんなさいといったじゃないですか」といって通りすぎていきました。それが 30 年前、15 年前のことでしたが、つい最近になって、もうほとんど 60 歳になるんですが、あの 30 年前の白人の男性、私の傘が当たったからといって私に罵りの言葉をかけた白人の男性が、15 年前の私だったと気づいたのです。そして 30 年前に「謝ったじゃないですか」といった私は、15 年前に「ごめんなさいといったじゃないですか」といった若い女性だったと気づいたわけです。そんなことに気づくのに 60 歳近くまでかかってしまうとは、なんと自分は愚かなことなのかと改めてあきれた次第です。

今日はキリスト教徒の方々がたくさんいらっしゃる中で、こんなことをいうのは恥ずかしいのですが、基本的に毎日、少しずつ聖書を読むことを習慣にして、ここ数年は『旧約聖書』を読んでいます。たいした

知識もございませんので、通りいっぺん、目を通すだけですが、『旧約聖書』を読んでいると、「神がイスラエルの民を選び、恵みを与えながら、やがて民が神を裏切り、怒りを買って神に罰せられ、民は赦しを乞い、そして神は民を赦す。しかし民は再び過ちを犯し、神の怒りを買うという、そういう凄惨な過ちの歴史が書き綴られています。振り返ってみると私の1日は「今日はいいい人でいよう、今日は謙虚で生きよう」と思いながら、それから30分もたたないうちに電車が混んでいることに憤りを感じ、通りで人と接触したことに憤慨し、そして反省して落ち着こうと思いながら、30分後には学生に対して不満を感じている。つまり私の1日がイスラエルの歴史の縮小版だと、これもこの歳になって改めて気づくわけです。

誰の言葉であったか、おそらく仏文学者の渡辺一夫の言葉と記憶しますが、「人は他人の中の狂気を容易に見つけるけれども、自分の中の狂気を見つけることほど難しいことはない」という言葉がございす。その言葉を改めて思い出した次第です。

「アメリカはどこに向かうのか？」というテーマで私が申し上げたいことは極めて単純であって、我々はアメリカの過ちやアメリカの愚かさの中から学ばなければならないし、そして同じような過ちや愚かさがい我々の中にもあることを謙虚に理解すべきだということでもあります。

新島のアメリカ、四つのアメリカ

新島襄は今から150年以上前にアメリカに渡りました。江戸時代に『^{れんぼう}聯邦^{しりやく}志略』という本を、たまたま手にとった。漢字で書かれたアメリカの歴史や地理を書いた本で、その中で新島は、アメリカは大統領を選挙で選ぶことを知るわけです。江戸時代の封建制度の中で、才能があり、向学心豊かだけれども、身分が低いが故に学ぶ機会を多くもたなかった新島には、大統領を選挙で選ぶ、日本でいうならば、征夷大將軍を自分たちで選ぶようなことであって、にわかには信じられないことだった。新島は「脳味噌がとろけ出るほど驚いた」と後に自伝に記しています。その後、新島が聖書をアメリカで学ぶ決意をして函館から国を出たことは、みなさん、ご承知のとおりです。

ところが、新島を乗せた船がアメリカの東海岸に近づく頃にニュースが飛び込んできて、南北戦争の後にリンカーン大統領が暗殺されたということを聞いて新島はさらに驚くわけでもあります。大統領を選挙で選ぶ、世界で最初の民主主義国であるアメリカ、その大統領が凶弾によって倒されてしまうアメリカ、アメリカの光と影に、新島は最初から出会い、学んだということになります。

それでも新島のアメリカでの体験は極めてポジティブなものでした。それは南北戦争という大きな戦争が終わった後、しかも東海岸のマサチューセッツのアマーストという町で学んだことが大きいことだろうと思います。ピューリタンの影響の強い町で学ぶ機会があったことが、新島のアメリカに対する認識を形づくっていると思います。新島は「アメリカこそが、キリスト教文明の中心だ」と確信して日本に戻り、日本のアマーストにすべく、この同志社をつくったわけでもあります。

ところがそれから150年ほどたった今日のアメリカはどうなっているかというと、下院議長を選ぶのに15回も選挙をしなければならない。これは実に1859年以来のこと、南北戦争以前に遡らなければならないことでもあります。そして今、アメリカでは事ごとに共和党と民主党が対立する。あるいは左右が対立して「二つのアメリカ」といわれ、「アメリカの分断」が語られ、今日のアメリカは内戦状況にある、南北戦争

と同じ状況にあるとすらいわれているわけであります。

「二つのアメリカ」どころではない。共和党の中にさらに左右があり、民主党の中にさらに左右があって「4つのアメリカ」だという人もいます。ある学者によると今のアメリカは四つに分類できる。スマートなアメリカ、ストロングなアメリカ、リアルなアメリカ、ジャストなアメリカです。「スマートなアメリカ」というのはハーバードやスタンフォード大学のような有名な大学を出て大変優秀で、自由や理想を語り、国際協調を語る。しかし、自分たちの手は汚さないというエリートたちのアメリカです。そして「ストロングなアメリカ」は、アメリカは世界のリーダーでなければならない。そのためには他国に軍事介入しなければならないという意気軒昂なアメリカです。そして「リアルなアメリカ」というのは、そうした中で貧困に苦しみ、教育を受ける機会に乏しく、自分たちの暮らしを必死で生きる庶民のアメリカです。そして「ジャストなアメリカ」は、人種差別は許されない、人々の平等は認められなければならない、人権を全うしなければならない、平和を守られなければならないと、自分たちの正義感だけを語るアメリカです。

そして今日のアメリカでは、ご承知のとおり、昨年6月、連邦最高裁判所が50年ぶりに人工中絶に関する判決を覆しました。1973年、「ロー対ウェイド」の判決で人工中絶は女性の権利であると連邦レベルで認められたものを覆し、人工中絶の是非は各州の判断に委ねるとした。その結果、アメリカ50州のうち14州で人工中絶が事実上禁止されるようになりました。去年、オハイオ州では12歳の少女がレイプされ、その結果、妊娠してしまったが、オハイオ州は人工中絶を禁止したので保護団体、支援団体に守られて彼女は隣のイリノイ州のクリニックで中絶の手術を受けたという事態も起こっています。過去に遡ろうとするアメリカが一方であります。

ところが他方、先般の11月の中間選挙を見てもみると、どんどん変わっていくアメリカも感じられるのです。あの南部のアラバマ州ですら初の女性の上院議員が誕生しました。オクラホマ州では初めてネイティブ・アメリカンの上院議員が誕生しました。バーモントではレズビアンの下院議員が当選しました。カリフォルニア州では初めて移民でゲイの下院議員が当選しました。メリーランド州は初めて黒人の州知事を選びました。アーカンソーですら初めて女性の州知事を選び、ロサンゼルス市でも初めて黒人の市長を選んだわけです。このようにジェンダーやセクシュアリティ、エスニシティを超えた多様な変化が、今アメリカで起こりつつある。「過去に戻ろうとするアメリカ」と「どんどん変わっていかうとするアメリカ」がせめぎ合っている。そうした中で社会的な亀裂が深まっていますが、より大きな背景としては急速に広がっていく貧富の格差、トップ1%の人が全体の富の2割をもっている。トップ1割の人が全体の富のほぼ半分をもっている。ところが下位50%の人が全体の富の1割少ししかもっていないという極端な貧富の格差が広がりつつある。

そしてエスニックな構成も急速に変わりつつあって、2010年のアメリカでは63%の人がいわゆる白人でしたが、2020年にはそれが60%になって、おそらく2045年には白人が過半数を割るようになり、2060年には白人はアメリカの人口の4割になってしまう。その分、ヒスパニックの人々、ムスリムの人々、アジア系、さまざまなエスニック・グループが増えていく。それによって当然、キリスト教、プロテスタント中心のアメリカではなくなっていく。エスニシティやジェンダー、セクシュアリティ、宗教など、さまざまなことで大きく変わりつつあるアメリカというのが、その背景にあると思います。

日本の今後

さて「他者から学ぶ」という点でいえば、日本はどうなるのでありましょうか。まずアメリカは人口が増え続けている。今、3億3000万人ですが、毎年、100万人の移民を受け入れています。アメリカは2050年には人口がさらに5000万人増えて3億8000万人になります。2060年には4億に達するといわれています。さすがにアメリカも2060年の4億が頂点で、そこから人口はピークアウトすると見られていますが、あと40年近くはアメリカの人口は増え続けていきます。ところが、日本は長らく人口減少に苦しんでいて、今、1億2500万人ほどの人口ですが、今世紀半ば、2050年には1億人を切ると見られています。ということは、あと30年ほどで日本は2600万人くらいの人口を失う。2600万人というのは、イメージしにくいですが、ざっくりいうと東京都と九州全体が消滅するほどの数字です。東京都の人口が1400万人。九州の人口が1300万人、これから30年の間に東京都と九州の人口がなくなる。それくらいの人口減少が待っているわけです。

高齢化の度合いは非常に速いスピードで進んでいる。今や日本で100歳以上のお年寄りが7万人おられます。そのうちの8割は寝たきりです。2050年にどうなっているか。さまざまな未来予測がありますが、一番大きな数字は東京大学高齢社会研究機構が出していて、100万人になっているということです。2050年の日本は人口1億を切っている。100人に1人が100歳以上になっているかもしれない。

さらに今日でも日本に住む人の2・3%は外国人であります。都道府県別でいうと、東京が一番多く4%が外国人です。中でも新宿区が突出していて12%は外国人です。新宿では8人に1人が外国人です。今の趨勢が続けば2060年には日本全体でも人口のほぼ1割が外国人になると見られています。2060年の日本は全国で新宿区並になっているということです。

日本もこれから人口減少とともに移民の方を受け入れるようになる。日本人以外の人々と共存するようになる。そうすると実は今日のアメリカが抱えている問題を我々も追体験することになる。貧富の格差も日本でもどんどん広がっている。今日のアメリカの悩み、苦しみをやがて我々も追体験するようになるだろうと思います。

では日本ではジェンダーやセクシュアリティの問題はどうなっていくか。日本ではまだ同性婚が認められていません。先進国で同性婚を認められていないのは日本くらいのもんです。これがどうなるか、わかりません。日本国憲法第24条は「婚姻は両性の合意のみに基づいて成立する」と書かれていて「婚姻は両性の合意」と書かれています。法律家や憲法学者の中には、この24条の規定にもかかわらず、憲法を変えずに同性婚ができるという向きもありますが、憲法9条のもとで集団的自衛権を認めるのは解釈改憲だ、違憲だといいつつ「24条では解釈改憲をしろ」というのであれば、いささか整合性に欠ける議論ではないかと思います。

昨年来、陰惨な戦争がウクライナで続いている。ロシアがウクライナに侵攻している。アメリカはウクライナを強力に支援していて、日本もさまざまな形で支援していますが、平和の問題とどのように向き合っていくのか。平和について祈ることは大切です。平和について考えて語ることは大切です。しかしながら、人々の命が脅かされないところで平和について語るだけで自己満足に陥ることは危険です。一言で平和といっても、それは一人ひとりの心のうちの平和という意味での平和と、社会に秩序や安定がもたらされているという平和、そして社会的な正義が追求されているという平和があります。社会が混乱に陥って

いても、一人の人間として悟りを開き、個人としては平和が実現している。だから社会がどんなに^{びらん} 紊^{らん}れていても構わないといえるのか、あるいは社会は安定しているが、それは不誠実な秩序のもとで安定している、必ずしも人権が守られていない。基本的な権利が保障されていない。強権的な体制のもとで、しかし秩序が安定している。それを我々は平和というのか、逆に不正を正そうとして人権を守ろうとすると混乱が起きて社会が不安定になってしまう。実は平和の中でさまざまなパラドックスがある。平和を願い、平和を祈ると同時に、その平和を担保するために我々はどのような行動をとるべきなのか、そして不幸にして平和が破れた時、我々はどのような行動をとるべきなのか。そういう努力や、より深い思索を欠いて平和を語ることは自己満足に陥り、それは間違いではないにしても、空虚な言葉になってしまうかもしれない。ということへの向き合い方、日本がアメリカのようにすればいいとは、とても思いません。しかし我々が「より誠実に、人として、社会として平和と向き合うためにはどうすればいいのか」ということを考えていかなければなりません。

アメリカでもそうですが、ヨーロッパでも日本でも、その足音は聞こえますが、「ポピュリズム」がしばしば語られます。大衆の耳障りのいいことを語ることによって一時的な支持を得て、政治的な影響力を伸ばそうとする動き、それをポピュリズムと呼びます。ポピュリズムは危険なことだ、だからエリートの専門知識に任せよ。リーダーたちの力に委ねようとはならない。一部のエリートの専門知識や経験だけに委ねるエリートイズムもまた、危険なことでもあります。大衆のその時々欲情に任せた政治も、エリートの狭い専門的な知識と経験や彼らの利益だけに任せる政治も、ともに危険なことだろうと思います。大衆の声を聞きながらエリートの専門性も生かしていくという相互作用が求められます。

今から150年近く前にアメリカから戻ってきた新島が、ここで同志社英学校という、実に小さな学校をつくった時、彼が目指したのは、大衆でもなく、一部の特権的なエリートでもなく、「一国の良心」ともいえるべき人々を育成しようとしたわけです。そういう異なる立場や異なる階層、異なる考え方の人たちとの間の対話を進めていって、自分が信念をもつことは大事だけれども、しかし自分の信念が他人の中に狂気を見るように、もしかしたら自分の信じているものが間違いなのかもしれないという謙虚さ、そして反省する気持ちを常にもちながら調整して進んでいく、そのことが、一人ひとりの人間にとっても大事であるし、今の混乱する、揺れ動く、私たちの大切な隣人、アメリカを見つめながら、我々日本社会が学んでいかなければならないことではないかと思います。

一言お祈りをいたします。在天の父なる神さま、今朝、敬愛する兄弟姉妹とともに、祈りの時をもてましたことを心より感謝いたします。我々一人ひとりには誠に弱く、実に愚かで、しばしば傲慢に陥ります。異なるものを差別し、異なるものを排除し、異なるものから学ぼうといたしません。どうぞ、我々が異なるものと共存し、互いに学びあって、あなたが示された道を歩んでいくことができるようにお導きください。この、いと小さき祈りを主イエス・キリストの御名を通じて御前に捧げます。アーメン。

2023年1月18日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録